

全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会(1968~1977)の研究(6) — 第9・10回大会の概要と競技記録 —

A Historical Study of the Noto Peninsula Ekiden for Selected Japanese Universities during 1968-1977, Part 6 — Documentations and Records of the 9th and 10th Race Competitions —

大久保 英 哲 (人間科学部スポーツ学科特任教授)

Hideaki OKUBO (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Specially-appointed Professor)

親 谷 均 二 (人間科学部スポーツ学科非常勤講師)

Kinji OYATANI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Part-time Lecturer)

北 川 潔 (星稜高校陸上競技部顧問)

Kiyoshi KITAGAWA (Seiryō High School, Track & Field Club Adviser)

櫻 井 貴 志 (人間科学部スポーツ学科准教授)

Takashi SAKURAI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Associate Professor)

佐々木 達 也 (人間科学部スポーツ学科講師)

Tatsuya SASAKI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Lecturer)

西 村 貴 之 (人間科学部スポーツ学科講師)

Takayuki NISHIMURA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Lecturer)

阿 羅 功 也 (人間科学部スポーツ学科助手)

Koya ARA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Assistant)

〈要旨〉

第1回開催(1968)から第10回大会(1977)まで行われた「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会」(「能登駅伝」)は、かつて日本大学三大駅伝と言われた大会のひとつであった。筆者らは、この日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程を明らかにすることを目的に、第1回開催(1968)から第7回大会(1974)までの各大会のレース概要とチーム、選手、区間ごとの競技記録等をまとめてきた。本稿では、第9回大会(1976)及び第10回大会(1977)のレース概要とチーム、選手、区間ごとの競技記録をまとめ、報告する。

〈キーワード〉

能登駅伝, 駅伝競走, 実施記録

はじめに

本論文は、大久保英哲・親谷均二「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程—第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで—」(金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号)をはじめとする一連の研究⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾に引き続き論考であり、第9・10回大会分のコース、実施記録、選手名、順位、タイム、大会の特色等を明らかにする。

1. 第9回大会 1976(昭和51)年

開催期間は、昭和51年11月21日～11月23日。主催は、北



写真1. 第9回大会プログラム表紙

信越学生陸上競技連盟。後援は、日本学生陸上競技連合、石川県、富山県、関係市町、読売新聞社、報知新聞社である。第8回大会までは読売新聞社と報知新聞社が後援に回った。主管は、石川陸上競技協会、富山陸上競技協会である。

参加チームは、北海道選抜、東北選抜、北信越選抜、日本体育大学、駒澤大学、国土館大学、東京農業大学、中京大学、大阪体育大学、京都産業大学、中・四国選抜の11チームである⁽⁶⁾。

第9回大会の見所について11月13日読売新聞⁽⁷⁾は次のように報じている。

晩秋の能登路で、力とスピードを競い合う「第9回全日本大学能登半島一周駅伝競走選手権大会」は、いよいよ21日午前9時、高岡市の読売新聞北陸支社前をスタート、能登半島を一周し、23日午後、金沢市の石川県庁前へゴールする26区間、341kmのコースで行われる。このコースは、全国の大学駅伝では最長、しかも海岸線を縫う、すばらしい景観。起伏とスケールの大きさでは、箱根、伊勢駅伝とともにわが国の大学三大駅伝の1つに数えられている。今回は8度目の優勝を狙う日体大をはじめ、初出場の国土館大、地元北信越学連、遠来の北海道学連など全国の強豪11チームが参加して日本一を競う。各チームともたゆまぬトレーニングを重ね、コンディションも上々といい、このレースが期待されている。

今大会の1番の見所は、前回優勝チームの日体大が通算8度目の優勝を飾るか、年を追うごとに力をつけてきている東京農大（前回3位）、中京大（前回5位）が“打倒日体大”の宿願を果たすか、さらに初出場の国土館大の活躍は一など。各チームの戦力を探ると、日体大は、キャプテンの塩塚をはじめ、関、石井の4年生トリオなど豊富なレース経験者を揃え、さらに中村ら7人の新人を加え、選手層の厚さはさすがである。和田、関口、荒野らの消えた穴を全く感じさせない。

この日体大が最もマークするのが東京農大。「昨年は、2位と11分、1位と26分の差だったが、走者配置をうまくやればこの差はぐんと縮まる。ぜひ、今年こそは」（中村実監督）と初優勝に燃えている。これを裏付けるように、岩瀬、壺岐、佐藤、野村、福田と経験豊かな選手が顔を揃え、層の厚さでは、日体大に決して引けを取らない。中京地区唯一の出場校、中京大は、前回、関東勢の前に善戦及ばず、5位に甘んじたが、今回は3、4年生を中心にチームを編成。18人中3、4年生が13人を占めている。自らマラソンで鍛え

た中尾監督の好采配が見物だ。

これを追うのが大阪体育大と京都産業大。大阪体育大の豊岡監督は「昨年は、選手層の薄さから6位に甘んじたが、今回は新人の育成に全力を注いできたので、目標はあくまで優勝」と強気。京都産業大の伊東監督も「毎回東京勢にやられっぱなし。うちのチームは全体にまとまっており、走力もレベルアップした。上位入賞は間違いない」とファイト十分。

地元北信越学連チームは、木村（金経大）、立蔵（金工大）、半田（同）のベテランが残っており、親谷監督も「何とかして5位以内に…」と、張り切っている。

第9回大会は大東文化大が不参加のため、東京農大や中京大、また初出場の国土館大が日体大とどう競うのかが見所として取り上げられている。北信越学連は念願の下位脱出を狙っていることが親谷監督のコメントからも伺える。

開会式の様子について読売新聞11月21日朝刊⁽⁸⁾は次のように報じている。

開会式では、北信越学生陸上競技連盟の川谷義弘幹事長が開会宣言、昨年度優勝校の日体大・石井隆土主将から優勝旗を返還。稲置繁男北信越学生陸上競技連盟会長が「諸君の中から将来の日本マラソンを背負う選手が育ってほしい」、木村一義読売新聞北陸支社長が「このコースは変化に富み、また気候条件も厳しい。全員が実力を出し切ってほしい」とそれぞれ挨拶をし、川原主馬高岡市教育長らが祝辞を述べた。これに対し、参加選手を代表して北信越学連チームの山内正人主将（金沢大）が「学生らしく、最後まで走り抜きます」と宣誓、開会式を終わった。

大会補助役員は、自衛隊が15台のジープなどとともに支援したほか、県立中島高校陸上部員21人も審判補助として自主参加している⁽⁹⁾。



写真2. 開会式記事（読売新聞11月21日朝刊）

第1日目の大会のもようを11月22日読売新聞夕刊¹⁰⁰は次のように報じている。

1日目は、前半を雨にたたられたものの風はなく、後半に入ると時折日もさすまざるコンディション。日体大は1区の後半で、トップに起用された石井が先頭グループで抜け出し、照井、北中、中村がこれを継いだ。5区、伊藤が体調を崩したことから首位の座を東京農大に奪われたものの、続く6区で主将の塩塚がすぐに抜き返した。その後も新宅、山根、関、小沢と継ぎ、1、4、6、9区で区間新記録をマーク。昨年ベストメンバーを揃えて出した大東文化大（今回は不出場）の記録を27秒縮める新記録で、東京農大に3分10秒の差を付け、人垣に埋まる珠洲市役所前の1日目ゴールに飛び込んだ。日体大に次ぐ東京農大は、前半は中位につけていたが、石川県入りから追い上げ、後半は日体大をマーク、「予想通り」（小池マネージャー）の2位の確保、3位には中京大が入った。初出場の国士舘大は、4区からじりじりと追い上げ、9区で崎口が、先行する駒沢大の石原を捕らえ、10区の五十嵐がそのままゴールインして第4位。第6回大会以来3年ぶり出場の駒沢大は5位に食い込んだ。これに対し、地元期待の北信越学連チームは、1区でエース草間が8位に頑張り、立蔵、広瀬で10位になったが、4区の森が健闘、9位に盛り返した。しかし、5区から最下位に落ち、9区の木村などの活躍があったものの、“一ケタ”で初日のテープは切れなかった。

第2日目の大会のもようについて11月23日朝刊¹⁰¹は次のように報じている。

22日は午前9時、黒瀬珠洲市長と田端同市議会議長2人の合図で、同市役所前をスタート。11区（この日の第1区）の後半で先頭集団から抜け出した日体大は、続く12区に起用された照井が下り坂のコースを見事な走法でピッチを上げ、区間新をマークして独走態勢。13区の斗高も区間最高、14区萩谷、15区出口も無難につないで2日目も悠々テープを切った。この日の2位は中京大。前半4位につけた後、14区の毛利が区間新をマークして国士舘大の湊を抜き、15区の中瀬へ。中瀬も快走、2位を行く東京農大の坂口を抜いて2番目でゴールイン。初日2位の東京農大は、この日、3位になったものの、通算では2位を保った。初出場の国士舘大は、2日目も4位。3年ぶり出場の駒沢大も通算5位。特筆されるのは、2日目の東北学連。初日8位の同チームは、2日目のトップに起用された末永が

5位と頑張り、以後も良く走り、駒沢、大阪体育大などを押さえた。地元期待の北信越学連は、11区に起用された浄土（金沢大）が9位と踏ん張り、12区の山本が最下位に落ちたが、エース草間が13区で区間4位の快走で3人抜きをして8位。14区の立蔵、15区の木村がそれぞれ1人ずつ抜かれたが、10位という成績。通算でも10位に上がった。

第1日目と同様に、第2日目も日体大が首位でゴールした。日体大はこれまで、3日間連続で首位という完全優勝を果たしたことがなく、完全優勝に望みをつないだ。

北信越学連はエース草間が快走し、区間4位で走り、地元の期待に応えた。

第3日目の大会のもようについて11月24日朝刊¹⁰²は次のように報じている。

最終日は激しい雨と強風の中でのレース。特に能登外浦の海岸沿いに出た18区からの3区間は、15m前後の横殴りの風と冷雨。選手は顔を下げたの苦しいレースとなった。こうした中で、大会前から圧勝の呼び声が高かった日体大は、17区（この日の第2区）の関が、先行する国士舘大、東京農大を次々に抜き、トップに立つと、19区塩塚、21区山根、24区石井、25区斗高、アンカーに起用された1年生中村がともに区間最高記録をマークするなどの快走で、第1日目、第2日目に続き、この日も首位でゴール。念願の“完全優勝”をついに実現させた。通算2位には、これも評判の高かった東京農大が入った。16区（この日の第1区）を2位でスタート、17区で3位に落ちたものの、続く18区の佐藤が区間最高記録をマークして再び2位に上がり、その後の8選手が無難につないで「予想通り」（高橋コーチ）の通算2位となった。初出場の国士舘大は「コースが全くわからなかった」ことが大きく響き、16区の前山が区間最高でたすきを渡し、以後の各選手が「コースを読みきれず力を出せなかった」（西山監督）とはいえ、この日3位でテープを切り、通算でも4位に食い込んで実力を発揮した。また、3年ぶり出場の駒沢大も通算5位に入った。

前日10位と健闘して期待された北信越学連は、16区に起用された山内正人主将（金沢大）が、3週間前スパイクしたことから振るわず、スタートでつまづいた。一時は18区広瀬晃二（福井工大）、19区立蔵義春（金沢工大）らの力走で10位に上がったほか、アンカーに起用されたエース草間進（金沢工大）が、前日の区間4位に気を良くした上、「北海道だけには負けたくない」と疲労で足重くなった足に鞭を打ち、気力で

区間3位をマークしたが、北海道に及ばず、通算でも最下位に甘んじる結果となった。しかし、親谷均二監督は「今回は山内正人（金沢大）、浄土成記（同）、半田宗義（金沢工大）と主力3人が故障で、実力を出し切れなかったが、草間進（金沢工大）、広瀬晃二（福井工大）など若いメンバーが活躍してくれたことから、来年に大きな期待を寄せている」と“若い力”の台頭を喜んでいた。

第9回大会について坂井敏夫審判長は次のように講評している¹²⁾。

今年は初日、2日目と絶好の駅伝日和に恵まれたが、最終日は、ひどい天候で条件是最悪だった。しかし、参加11チーム全部が最後まで良く頑張った。特

に、今大会は、例年下位チームが徐々に上位に迫り、これが何よりうれしい。記録的にも、区間新などがかなり出た。来年は第10回記念大会で、20チームの参加を期待している。

日体大がついに完全優勝を果たした。悪天候だったのにも関わらず、4区間で区間新記録をマークし、快走を見せた選手が多かった。日体大の最大の敵である大東文化大が出場していなかったことも完全優勝に繋がったのではないかと考えられる。

北信越学連は最下位に甘んじたが、草間選手や広瀬選手などの若い選手が活躍を見せ、親谷監督は次の年に期待を寄せた。

第9回全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会

区間	チーム名(監督)	日本体育大学 (岡野 章)	東京農業大学 (中村 実)	中京大学 (中尾隆行)	国士舘大学 (西山一行)	駒澤大学 (森本 葵)	京都産業大学 (伊東輝雄)	大阪体育大学 (豊岡示朗)	東北学連 (大宮 昇)	中国・四国学連 (宮原満孝)	北海道学連 (大村良治)	北信越学連 (親谷均二)
1	高岡 ～氷見	18.0 km 石井 隆士 ①54.05	岩瀬 哲治 ⑥55.07	穴戸 春寿 ④55.04	横田 貞純 ⑦51.45	原口 豪 ③55.00	岩木 久典 ②54.57	高岡 光男 ⑤55.06	市原 常明 ⑨57.34	山崎 佳孝 ⑩59.01	本間 敦 ⑪11.00.23	草間 進 ⑧56.48
2	～黒崎	18.9 km 照井 典勝 ②58.04	黒岩 哲夫 ④59.17	毛利 泰文 ③58.28	柳川 順三 ⑦1.00.05	大越 正禪 ①57.24	伊藤 博幸 ⑤1.00.07	加藤 暢 ⑥1.01.03	村上 公徳 ⑦1.02.30	横山 暁 ⑧1.02.55	土田 雅満 ⑩1.07.08	立蔵 義春 ⑨1.05.11
3	～七尾	15.7 km 北中 純一 ①48.12	信時 勝 ③48.20	長友 清美 ④48.33	佐藤 修 ⑦50.29	萩野 茂 ⑤50.26	東 良尚 ⑥50.28	浜田 和利 ④50.09	田中 実 ⑧52.39	松井 幸也 ⑩55.39	野戸 美治 ⑨54.56	広瀬 晃二 ⑪59.01
4	～中島	18.1 km 中村 孝生 ①54.52	丸橋 久良 ②55.17	長井 正晃 ⑥58.33	橋口 憲一 ④56.58	菊地原浩二 ③56.41	村松丈太郎 ⑤58.11	大城 一利 ⑦59.52	星 文夫 ⑧59.58	上野 哲男 ⑪1.04.35	阿部 茂 ⑨1.00.11	森 喜太郎 ⑩1.00.17
5	～穴水	16.7 km 伊藤 哲二 ④54.18	山本 吉光 ①51.07	中瀬 敬夫 ②52.15	下重 庄三 ③53.57	鈴木 俊通 ⑤54.28	藤川 秀幸 ⑧55.54	渡辺 公照 ⑥54.38	末永 真 ⑦54.57	上岡 利伸 ⑨58.42	林 弘嗣 ⑩59.25	倉本 佳和 ⑪1.01.15
6	～上曾山	11.0 km 塩塚 秀夫 ①33.20	佐藤 誠 ②33.59	中川 善幸 ③36.06	横地 仁志 ④36.27	黒田 甲子 ⑧37.04	山口 隆樹 ⑥36.40	岩見 政勝 ⑤36.38	根田 孝広 ⑦36.50	藤井 清志 ⑩38.10	田村 利光 ⑨37.23	吉田 清隆 ⑪41.54
7	～鶴川	11.4 km 新宅 雅也 ①33.31	加藤 安信 ②33.49	角正 美之 ④34.53	吉山 嘉一 ⑤35.04	沼崎 理 ⑨36.30	吉田 昭男 ③34.45	三輪 成 ⑧35.37	富樫 公一 ⑥35.08	河島 則之 ⑦35.31	中島 弘和 ⑪39.57	宮本 一義 ⑩38.21
8	～宇出津	9.0 km 山根 信二 ①27.56	福田 栄作 ②28.10	戸部 裕之 ④29.02	轟木 喜一 ③28.29	松沢 武 ⑧29.54	伊藤 達朗 ⑤29.15	竹本 博 ⑥29.23	竹田 洋司 ⑦29.47	羽原 正雄 ⑩32.00	喜多 秀幸 ⑨30.26	岡田 孝 ⑩31.06
9	～松波	12.3 km 関 英雄 ①37.06	吉岐 利美 ③38.47	池野 修二 ⑤39.55	崎口 幹夫 ④39.42	石原 一雄 ⑦40.40	田中 義彦 ⑥40.27	竹中 祐輔 ⑧41.06	渡辺 晴仁 ②38.34	高沢 有二 ⑩42.37	松坂 吉通 ⑪43.50	木村 直樹 ⑨41.47
10	～珠洲	10.7 km 小沢 信一 ①32.36	下野 郁雄 ③33.17	宮本 勝人 ②33.15	五十嵐克三 ⑤33.31	光広 静彦 ⑦34.07	木村 憲二 ④33.18	大和 忠広 ⑥33.42	述村 良孝 ⑧34.46	石田 秀樹 ⑨36.44	田村 祐一 ⑩37.09	山内 正人 ⑪37.59
第一日	141.8km	①7.14.00	②7.17.10	③7.26.04	④7.31.07	⑤7.32.14	⑥7.34.02	⑦7.37.14	⑧7.42.43	⑨8.05.34	⑩8.10.48	⑪8.13.29
11	珠洲 ～栗津	14.4 km 小山 英士 ①44.37	福重 寛司 ②44.41	穴戸 春寿 ③44.47	原山 嘉昭 ④44.56	千葉 博久 ⑥45.29	松山 光久 ④47.30	森 久志 ⑦45.32	末永 真 ⑤45.09	松ノ谷 昭 ⑩48.59	中山 雅之 ⑪49.15	浄土 成記 ⑨48.13
12	～狼煙	6.9 km 照井 典勝 ①20.00	春田 英二 ③21.16	佐々木秀麿 ④21.25	柳川 順三 ②21.00	佐上 精一 ⑤21.39	満寿川 誠 ⑩23.26	大越 一利 ⑥21.42	村上 公徳 ⑦21.54	山崎 佳孝 ⑧22.32	野戸 美治 ⑨23.08	山本 哲夫 ⑪24.55
13	～大谷	16.7 km 斗高 英敏 ①51.32	小野寺貞雄 ②52.13	疋田 康彦 ⑥55.11	市川 勉 ③53.32	石田 正治 ⑤55.09	山口 清久 ⑪56.56	黒崎 幸雄 ⑩56.16	星 文夫 ⑨56.12	川口 誠 ⑧55.35	田村 利光 ⑦55.21	草間 進 ④53.55
14	～南志見	17.5 km 萩谷 隆司 ②52.39	保谷 藤樹 ③54.20	毛利 泰文 ⑤52.29	湊 文昭 ⑥56.48	渡辺 要 ⑥57.13	中田 英一 ⑩1.00.22	竹本 博 ⑦58.08	三浦 文男 ④56.34	佐々木英雄 ⑧58.14	遠藤 正彦 ⑪1.02.07	立蔵 義春 ⑨59.25
15	～輪島	15.1 km 出口 彰 ②47.25	坂口 正人 ④48.37	中瀬 敬夫 ①46.39	渥美 義之 ⑨51.40	岡 秀夫 ⑥49.56	藤倉 勇 ④49.11	三輪 成 ⑦49.53	市原 常明 ⑤49.24	河島 則之 ⑥49.25	加藤 隆 ⑪53.37	木村 直樹 ⑩52.28
第二日	70.6km	①3.36.13	③3.41.07	②3.40.31	④3.47.56	⑥3.49.26	⑨3.57.25	⑦3.51.31	⑤3.49.13	⑧3.54.45	⑪4.03.28	⑩3.58.56
通算	212.4km	①10.50.13	②10.58.17	③11.06.35	④11.19.03	⑤11.21.40	⑦11.31.27	⑥11.28.45	⑧11.31.56	⑨12.00.39	⑪12.14.16	⑩12.12.25
16	輪島 ～上縄又	7.8 km 伊藤 哲二 ③24.35	福重 寛司 ②24.35	長井 正晃 ⑤24.54	原山 嘉昭 ①24.30	光広 静彦 ⑧25.31	吉田 昭男 ④24.40	浜田 和利 ⑥24.56	三浦 文男 ⑦25.9	藤井 清志 ⑩27.17	野戸 美治 ⑨27.08	山内 正人 ⑪30.41
17	～門前	13.1 km 関 英雄 ①39.43	黒岩 哲夫 ④41.15	疋田 康彦 ⑨44.47	崎口 幹夫 ⑥41.45	菊地原浩二 ②40.04	東 良尚 ⑦41.53	加藤 暢 ⑤41.36	渡辺 晴仁 ③41.15	青山 和敏 ⑪47.20	土田 雅満 ⑧43.06	岩村 重芳 ⑩44.51
18	～剣地	11.4 km 新宅 雅也 ⑤38.28	佐藤 誠 ①37.18	佐々木秀麿 ⑥39.48	横田 貞純 ④38.26	黒田 甲子 ⑦40.11	木村 憲二 ③38.14	高岡 光男 ②37.57	佐藤 芳勝 ⑪42.39	高沢 有二 ⑧41.50	松坂 吉通 ⑩42.10	広瀬 晃二 ⑨41.49
19	～富来	12.8 km 塩塚 秀夫 ①38.28	吉岐 利美 ②40.53	宮本 勝人 ④41.49	下重 庄三 ④40.54	石原 一雄 ⑦42.47	山口 隆樹 ⑥42.45	渡辺 公照 ⑤41.54	平 重行 ④44.08	石田 秀樹 ⑩45.40	桜打 司 ⑪47.06	立蔵 義春 ⑧44.07
20	～直海	15.1 km 北中 純一 ②46.56	信時 勝 ③47.51	中瀬 敬夫 ④48.56	柳川 順三 ⑤49.22	大越 正禪 ①46.31	村松丈太郎 ⑥50.08	黒崎 幸雄 ⑦52.06	田中 稔 ⑤51.11	藤原 嘉樹 ⑪55.20	阿部 茂 ⑧51.10	木村 直樹 ⑩55.11
21	～志賀	8.6 km 山根 信二 ②26.13	下野 郁雄 ③26.13	大西 博文 ④27.33	五十嵐克三 ②26.35	沼崎 理 ⑤28.12	藤山 孝志 ⑧28.56	金原 正明 ⑨29.12	渡辺 清美 ⑦29.12	上野 哲男 ⑨29.12	宮窪 幸弘 ⑩29.36	松波 秀治 ⑨29.36
22	～羽咋	14.1 km 小沢 信一 ②44.30	山本 吉光 ①44.16	角正 美之 ④45.36	佐藤 修 ⑥46.19	萩野 茂 ⑤45.58	岩木 久典 ④44.56	大和 忠広 ⑧46.47	谷内田幸雄 ⑨47.31	佐々木英雄 ⑥46.19	林 弘嗣 ⑪49.34	浄土 成記 ⑩48.08
23	～高松	15.6 km 坂本 亘 ③49.40	丸橋 久良 ②48.59	毛利 泰文 ①48.48	橋口 憲一 ⑤50.42	原口 豪 ⑤50.56	伊藤 博幸 ④50.25	岩見 政勝 ⑦51.20	山田喜生男 ⑪53.52	横山 暁 ⑧51.22	本間 敦 ⑨53.22	森 喜太郎 ⑩53.50
24	～津幡	12.8 km 石井 隆士 ①39.14	岩瀬 哲治 ②40.42	平尾 尚己 ⑤40.59	伊藤 悦禪 ⑥41.09	鈴木 俊通 ④40.49	田中 義彦 ③40.46	柿本 浩二 ⑩44.26	阿部 晴彦 ⑨44.15	上岡 利伸 ⑦43.12	中山 雅之 ⑧43.50	宮本 一義 ⑪44.29
25	～森本	7.4 km 斗高 克敏 ①23.00	福田 栄作 ②23.19	奈良 清隆 ⑤24.09	丸山 高幹 ③23.16	佐上 精一 ④23.32	伊藤 達朗 ⑨23.32	池田 功 ⑥24.14	鹿野 秀悦 ⑩25.35	山崎 佳孝 ⑧24.48	田村 祐一 ⑨25.47	畑 里志 ⑪28.06
26	～金沢	10.5 km 中村 孝生 ①32.56	加藤 安信 ②33.33	中川 善幸 ④33.44	轟木 喜一 ⑤33.49	千葉 博久 ⑥33.50	藤川 秀幸 ⑩36.01	森 久志 ⑦34.49	述村 良孝 ⑪37.28	川口 誠 ⑨35.27	田村 利光 ⑧35.05	草間 進 ③33.42
第三日	129.2km	①6.44.07	②6.49.19	⑤7.01.03	③6.57.47	④6.58.21	⑥7.01.48	⑦7.09.01	⑧7.22.04	⑨7.27.47	⑩7.29.31	⑪7.34.30
通算	341.6km	①17.34.20	②17.47.36	③18.07.38	④18.16.50	⑤18.20.01	⑥18.33.15	⑦18.37.46	⑧18.54.00	⑨19.28.26	⑩19.43.47	⑪19.46.55

1. 第10回大会 1977（昭和52）年

開催期間は昭和52年11月21日～11月23日。主催は第9回大会同様、北信越学生陸上競技連盟。後援も前回大会と同じく、日本学生陸上競技連合、石川県、富山県、関係市町、読売新聞社、報知新聞社である。主管は石川陸上競技協会、富山陸上競技協会。参加チームは、北海道選抜、東北選抜、北信越選抜、日本体育大学、駒澤大学、大東文化大学、東京農業大学、東海大学、中京大学、大阪体育大学、大阪商業大学、京都産業大学で前回大会出場した国士舘大学の代わりに大東文化大学が入り、全12チームであった。コースや通過予想時刻は第9回大会と同様である。

読売新聞11月11日朝刊^③の“ほくりく特集”は能登駅伝の展望や大会の裏方について次のように紹介した。

「今大会はダークホースの東海大の参加で、日体大を頂点にした上位戦線の予想は難しい」というのが戦前の一致した予想。前回大会は宿敵大東文化大の不参加で、2位の東京農大に13分余りの差をつけてV2（2連覇）を達成した日体大。前回、区間新記録を書き換えた照井典勝、中村孝生両選手をはじめ、斗高、北中、山根、小山ら、経験豊富なランナーを揃え、選手層の厚さは他チームの脅威。岡野章監督の好采配もあって優勝の本命に挙げられる。この日体大に迫るのは、第7回大会の優勝チーム大東文化大。優勝メンバーの森田主将、塩野、阿部ら最上級生を中心に「打倒日体大」を秘かに狙っている。また過去悪くても4位と、常に上位に入っている東京農大も山岡、丸橋らベテランを要所に配して一発勝負を狙っている。今年の箱根駅伝6位と、大学駅伝界に彗星のように現れた東海大も、初出場のハンデを乗り越えれば、侮れない力を発揮しそうだ。また駒沢大も各大学に引けを取らない戦力を備えている。この関東勢に、前回3位の中京大、京都産業大、大阪体育大など、中部、関西勢も上位に食い込む実力を十分に持っており、「関東勢何するものぞ」とファイトを燃やしている。地元の北信越学連チームは、前回の最下位の“汚名返上”を合言葉に、山内正人新監督のもと、心機一転、猛練習を積んできた。立蔵、草間（以上金沢工大）、浄土（金沢大）ら、実戦型の選手が残っているのが強みで「全国一流ランナーと走れるのが何より勉強」と、張り切っている。「能登駅伝」は別名“手作りの駅伝”とも言われる。第3回大会以来、主催者の北信越学生陸上競技連盟（稲置繁男会長）の役員、学生が、コース作りから、役員の腕章、コース案内板、各チームのたすき、旗すべて自前で作成、大会を運営している。毎回準備期間は大会

100日前。勉強の合間に徹夜もいとわずに手を貸す学生は延べ1500人にもなる。こうした学生たちの努力とともに、大きなレースを無事運営してくれる裏方さんたちの協力も忘れてはならない。記録、連絡、中継点係、選手輸送、交通整理……。各市町村の体協関係者、石川、富山両県警、自衛隊と、レースに関係する地元の人たちは、3日間で1000人を超える。交通量が増える中で、選手が十分に実力を発揮できるよう、見物客に事故のないように一と地の元の人たちの細かい配慮が「能登駅伝」を育ててきたといっても過言ではない。素朴な能登路に青春をぶっつけて走る。能登駅伝のコースは、自然と人情の走路でもある。シーズンオフの旅館や民宿、そして農閑期の地元の人たちはこぞって選手たちを歓迎、コースは駅伝一色となる。そこには選手と地元の人たちの和やかな心のふれあいが生まれ、数多くの駅伝ファンを作った。

第1日目の大会のようを昭和52年11月22日朝刊^④は次のように報じている。

1区の高岡一氷見間では、5km地点の高岡市伏木までは一団となって過ぎたが、国分浜に入ると坂本（日体大）、曾根（東海大）、新浜（京都産業大）、蜂須賀（東京農大）が抜け出してトップグループを作った。続いて千葉（駒沢大）、加藤（大東文化大）が追い、わずかに遅れて北信越学連の児玉（金沢大）らが続くというレース展開。上位グループの一角に食い込むと見られていた大東文化大は、高橋が区間タイム58分16秒という大ブレーキを起こし、予想外の11位で第2区へ引き継いだ。「1区の坂本の54分4秒の区間新記録は出来すぎです」（岡野章監督）と幸先いい滑り出しを見せた日体大チームは、大会を通じての最長区間2区（18.9km）でも、中村が快調に飛ばし、早くも“独走”かと思わせるレースぶり。岡野監督も伴走車にドカッと座って戦況を眺める余裕を見せた。日体大をぴったりマークする東京農大は、1区の山岡、3区の信時の力走で、七尾市役所前の第3中継点を1分25秒差で通過。4区に入って黒岩が俄然スパート。12km地点で1位の小沢（日体大）に200m差まで追い込んだ。しかし、5区の丸橋がややブレーキとなって再び新宅（日体大）に差をあけられ、7km地点で500m余りあけられたのが惜しかった。

第8回大会ぶり的大東文化大は、1区で11位と苦しいスタートとなった。日体大は、第1日目にして早くも独走かと思われるようなレース展開で、強さを見せつけたレースとなった。

第2日目の大会のようは読売新聞11月23日朝刊^⑤に次のように報じられている。

22日の珠洲、輪島地方は強い雨風に見舞われ、ゴールの輪島市役所付近では曇りも降るという選手泣かせの天候。各選手は頭からずぶ濡れになって内浦から外浦海岸へと力走した木ノ浦海岸、仁江海岸の吹きさらしコースでは、風速15mの突風に選手たちは前傾姿勢を取り、雨風をさえぎりながらのランニング。このため各チームとも前回大会の5区間の合計タイムより5～7分遅い記録になった。珠洲市役所―栗津バス停の11区では、大東文化大の主将・森田がすばらしいファイトで、後半からトップに出た。栗津中継点は、森田に続いて伊藤（日体大）、福重（東京農大）が1分以内で通過。さらに1分5秒遅れて、中京大が追い、東海大、京都産業大、駒沢大、北海道学連、東北学連がわずかの差で続くという激しいレースを見せ、沿道の駅伝ファンを喜ばせた。12区で長崎（大東文化大）のブレーキを突き、トップに出た小山（日体大）は2位以下を300m離して13区の照井にたすきを渡した。13区は内浦から外浦への峠越え。起伏が激しい上、北風が吹きつけ、2日目最大の難所。今度は2位の小林（大東文化大）が照井を追い上げ、中継点まで2.7kmの14km地点で完全に並び、再び激しい首位争い。大東文化大の逆転かと思われる場面もあったが、中継点1km前で、余力のある照井がスパートし、大東文化大の追撃を退けた。日体大は14、15区で坂本、北中が軽快なストライドで区間最高タイムをマークして圧勝した。大東文化大の奮起で2日目合計タイム3位に甘んじた東京農大は、2日間通算でかろうじて大東文化大を抑えて2位を守り、最終日の首位追撃に望みをつないだ。京都産業大も4位を守る健闘ぶり。通算タイムで京都産業大に3分34秒差の5位中京大、さらに東海大、駒沢大も5位に2分以内で肉薄、順位争いを一段と激しくした。北信越学連はスタート区間で浄土（金沢大）がトップに7分余り離されたのが響いた。児玉（金沢大）、立蔵、半田（以上金沢工大）の力走も及ばず、前日の9位から11位に後退した。

第3日目の大会のもようについて11月24日読売新聞朝刊^[6]は次のように報じている。

日体大のゆるぎない首位独走だった。前回大会の経験者15人に新人の新地らを補強。新人とベテランを巧みにエントリーした布陣はやはり他チームにとって厚い壁になった。中村の29分19秒を最高に、10000mの公認記録が29分台の選手を8人揃え、岡野章監督は、大会前から「3日間トップで9回目の優勝を飾りたい」と抱負を語っていた。その日体大で唯一気がかりは荒天。トラックでの練習が多い選手にとって、ロードに出た雨、風は大きなハンディキャップになる。しかし、2日目の強い雨風、3日目に、他チームが“期待”していたアクシデントは起きず、2

日目まで2位の東京農大との12分50秒差は21区で15分46秒に開いた。続く坂本亘、斗高、中村、坂本充、新宅がいずれも区間最高タイムで快走、ゴールでは21分の大差にまで開いた。長足の進歩を買って、1日目の1区に起用、見事区間新を出した坂本充は、3日目も区間最高を出し、2日目と合わせ3日間連続の区間トップ。岡野監督の采配にことごとく応えた選手たちの足と精神力は見事と言うほかない。東京農大は惜しかった。2日間の差を一気に詰めようと、福重、小野寺の4年生を16、17区に投入。しかし、福重は区間5位、小野寺は区間3位と、期待以上の働きはしてくれなかった。総合タイムでも、前回大会に1分2秒及ばず連続2位。出足のブレーキが響いた大東文化大は、最終日16区で、主将の森田がトップで走り、3日連続の区間最高タイムのエースらしい働きを示したが、持ち駒不足から、2位の東京農大との差を詰めるのが精一杯。初の4位に入った京都産業大は、前回の記録を14分49秒短縮、意欲的なレースぶり。北信越学連は、23区で区間7位の好タイムを記録した草間の頑張りなど、各選手が持てる力を十分に発揮。総合タイムでこれまでの記録を8分1秒縮めたのは立派で10位に食い込んだ。

閉会式の様子について11月24日朝刊^[7]は次のように報じている。

レース終了後、午後4時過ぎから金沢市の金沢女子短大体育館で閉会式が行われた。12チームの総合成績、各区間の個人記録が発表されたあと、優勝した日体大チームに稲置北信越学生陸上競技連盟会長と木村一義読売新聞北陸支社長から優勝旗と優勝盾が贈られた。また10回大会を記念して大会関係者も表彰され、団体では「能登駅伝」の裏方さんを務めた陸上自衛隊第14普通科連隊、石川、富山両県



写真3. 第10回大会を終えて、北信越学連の健闘を称える記事（読売新聞11月24日）

第10回全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会

区間		チーム名(監督)	日本体育大学 (岡野 章)	東京農業大学 (中村 実)	大東文化大学 (青葉昌幸)	京都産業大学 (伊東輝雄)	中央大学 (中尾隆行)	東海大学 (有吉正博)	駒澤大学 (森本 葵)	大阪体育大学 (豊岡示朗)	東北学連 (大宮 昇)	北信越学連 (山内正人)	大阪商業大学 (浦島 爽)	北海道学連 (大村良治)
1	高岡 ～氷見	18.0 km	坂本 充 ①54.04	蜂須賀 明 ④55.27	高橋 正芳 ①58.16	新浜 章浩 ③55.18	戸冢 春寿 ⑩57.51	曾根 厚 ②55.08	千葉 博久 ⑥57.01	加藤 暢 ⑤55.31	市原 常明 ⑨57.40	児玉 健 ⑦57.16	山崎 剛一 ⑧57.23	土田 雅満 ⑫58.34
2	～黒崎	18.9 km	中村 孝生 ③57.57	山岡 秀樹 ②57.53	宮地 敏孝 ⑥58.59	岩木 久典 ⑤58.49	長友 清美 ④58.23	菊地 泰利 ⑫1.06.07	菊地 原浩 ①57.19	二浜田和利 ⑦59.03	山田喜生男 ⑩1.03.37	半田 宗義 ⑨1.03.30	青木 実雄 ⑧1.02.06	吉田 健司 ⑪54.29
3	～七尾	15.7 km	萩谷 隆司 ②49.48	信時 勝 ③49.54	吉元 政昭 ①49.47	東 良尚 ④50.10	吉川 克宏 ⑥51.46	吉川 徹 ⑤50.58	日塔 仁 ⑦52.05	大和 忠広 ⑧52.11	竹田 洋司 ⑩55.14	木村 直樹 ⑪56.23	楠木 長武 ⑫56.46	喜多 秀幸 ⑨54.49
4	～中島	18.1 km	小沢 信一 ③57.35	黒岩 哲夫 ②56.39	法村 昌三 ④57.41	村松丈太郎 ⑦1.01.22	上地 修二 ⑧1.01.33	川島 二郎 ⑨37.45	大越 正禪 ①56.29	森崎 敏隆 ⑩1.03.05	星 文夫 ⑪1.04.49	立蔵 義春 ⑨1.0156	森宗 康典 ⑫1.04.56	林 弘嗣 ⑥59.57
5	～穴水	16.7 km	新宅 雅也 ④49.11	丸橋 久良 ③52.20	山元 章義 ②50.54	河内 克也 ⑥55.43	長井 正晃 ⑤53.15	関根 唯夫 ④53.09	宿理 和郎 ⑧58.01	船木 正信 ⑦57.55	佐々木 誠 ⑫1.01.43	竹沢 博 ⑩59.29	上野 和昭 ⑪59.38	岩館 佳弘 ⑨59.11
6	～上曽山	11.0 km	山根 信二 ④35.36	加藤 安信 ①34.35	後藤 守利 ②35.03	伊藤 博幸 ③35.27	佐々木秀磨 ⑤28.38	堀田 朋之 ④28.29	橋本 康司 ⑤36.00	藤本 真一 ⑧36.47	水田 鋭久 ⑩38.06	山本 崇 ⑪39.28	林 英昭 ⑥36.03	安居院高志 ⑫39.57
7	～鶴川	11.4 km	出口 彰 ②33.55	高橋 幸宏 ①33.39	森下 好美 ⑧35.14	村上 一郎 ⑤34.43	尾花 幸次 ⑥34.44	生野 俊道 ⑨34.51	阿部 文明 ⑪37.35	小野田芳史 ④34.36	辺見 裕之 ⑩37.27	大沢 幸造 ⑨36.58	佃 守 ③34.32	柴田 充 ⑫39.04
8	～宇出津	9.0 km	新地 憲宏 ①26.48	上田 勉 ②27.51	森岡 芳彦 ⑥28.49	山口 隆樹 ⑤28.38	福井 清孝 ③35.02	伊藤 孝 ④28.29	小島 栄次 ⑦29.22	竹中 祐輔 ③28.18	新聞 茂 ⑨30.00	水野 定敏 ⑧29.35	小松 修門 ⑪31.41	広 公 ⑫32.08
9	～松波	12.3 km	斗高 克敏 ①36.16	小野寺貞雄 ②37.28	望月 明義 ⑦39.37	玉置 昌宏 ④38.57	多田 芳徳 ⑥39.23	小田 倉茂 ③38.16	今田 智康 ⑤38.57	岩見 政勝 ⑤38.58	須藤 功 ⑨41.17	足立 利弘 ⑪41.25	井上 康行 ⑫42.24	鈴木 吾一 ⑩41.50
10	～珠洲	10.7 km	小塚 慎一 ②32.27	平野 淳俊 ③32.31	森田 義三 ①32.10	上川 勉 ⑤33.32	角正 美之 ④33.22	井川 善博 ⑥33.38	光広 静彦 ⑦33.57	黒木 良治 ⑧34.11	谷地田幸雄 ⑩34.59	草間 進 ⑨34.46	堀谷 育生 ⑪36.14	斉藤 秀樹 ⑫38.32
第一日		141.8km	⑦17.13.37	②7.18.17	③7.26.30	④7.34.06	⑤7.34.59	⑦7.38.07	⑥7.37.46	⑧7.40.35	⑩8.04.52	⑨8.00.46	⑩8.01.43	⑫8.08.31
11	珠洲 ～粟津	14.4 km	伊藤 哲二 ②43.59	福重 寛司 ③44.09	森田 義三 ①43.38	福田 保 ⑦45.51	金子 敏雄 ④45.14	川崎 信介 ⑤45.15	岡 秀夫 ⑨46.02	竹本 博 ①47.25	三浦 文男 ⑧46.01	浄土 成記 ⑫50.57	勝谷 弘志 ⑩46.39	林 弘嗣 ⑥45.50
12	～狼煙	6.9 km	小山 英士 ①20.38	下野 郁雄 ②21.05	長崎 裕一 ②21.37	田中 幹廣 ⑥22.13	佐々木秀磨 ⑤21.25	曾根 厚 ③21.10	松沢 武 ⑨22.49	永山 隆一 ⑦22.22	遠藤 雅裕 ⑩23.02	八瀬 晃二 ⑫24.07	堀谷 育生 ③23.01	喜多 秀幸 ⑧22.24
13	～大谷	16.7 km	照井 典勝 ②54.01	今西 辰哉 ⑥57.00	小林 雄二 ①53.34	福山 護 ③55.24	長井 正晃 ④56.23	新井 辰夫 ⑨58.42	渡辺 要 ⑥57.00	坂口 隆一 ⑧58.21	市原 常明 ⑤56.52	児玉 健 ⑩58.59	小林 睦和 ⑪59.49	船戸 真 ⑫1.01.20
14	～南志見	17.5 km	坂本 充 ①56.32	保谷 藤樹 ③57.36	平盛 惣一 ②56.55	藤川 秀幸 ④57.54	池野 修二 ⑧1.01.37	松崎 修 ⑦1.00.29	石田 正治 ⑤58.09	小野田芳史 ⑩1.02.15	山田喜生男 ⑥58.19	立蔵 義春 ⑨1.02.14	上野 和昭 ⑪1.02.53	遠藤 正彦 ⑫1.03.38
15	～輪島	15.1 km	北中 純一 ①45.34	坂口 正人 ④49.04	塩野 一昭 ②47.38	田中 義彦 ⑧51.02	奥田 稔 ⑥50.26	石田 和明 ④47.46	楠 康夫 ⑤50.15	竹中 祐輔 ⑦50.39	田中 稔 ⑨51.46	半田 宗義 ⑩53.32	井上 康行 ⑪56.22	宮窪 幸弘 ⑫58.07
第二日		70.6km	①3.40.44	③3.48.54	②3.43.24	④3.52.24	⑦3.55.05	⑤3.53.22	⑥3.54.15	⑨4.01.02	⑧3.56.00	⑩4.09.49	⑩4.08.44	⑫4.11.19
通算		212.4km	①10.54.21	②11.07.11	③11.09.52	④11.26.30	⑤11.30.04	⑥11.31.29	⑦11.32.01	⑧11.41.37	⑨12.00.52	⑩12.10.35	⑩12.10.27	⑫12.19.50
16	輪島 ～上縄又	7.8 km	小沢 信一 ②24.23	福重 寛司 ⑤24.29	森田 義三 ①23.57	新浜 章浩 ⑥24.42	多田 芳徳 ⑧25.21	生野 俊道 ③24.24	光広 静彦 ⑨25.33	藤本 真一 ④24.25	新聞 茂 ⑪25.43	大沢 幸造 ⑩25.40	林 英昭 ⑦25.19	岩館 佳弘 ⑫25.50
17	～門前	13.1 km	出口 彰 ①39.49	小野寺貞雄 ③40.18	後藤 守利 ⑤41.11	東 良尚 ⑧41.19	上地 修二 ⑦41.18	曾根 厚 ④40.41	大越 正禪 ⑨41.48	浜田 和利 ②40.02	須藤 功 ⑩41.58	足立 利弘 ⑫43.59	山崎 剛一 ⑥41.14	土田 雅満 ⑪43.15
18	～剣地	11.4 km	山根 信二 ②34.37	加藤 安信 ③35.28	塩野 一昭 ①34.18	上川 勉 ④35.37	佐々木秀磨 ⑤36.08	川崎 信介 ⑦36.46	今田 智康 ⑧37.05	森崎 敏隆 ⑥36.36	佐々木 誠 ⑩38.49	八瀬 晃二 ⑫39.38	佃 守 ⑨37.37	遠藤 正彦 ⑪39.25
19	～富来	12.8 km	萩谷 隆司 ③38.54	信時 勝 ②38.53	宮地 敏孝 ①38.33	玉置 昌宏 ⑦40.37	吉川 克宏 ⑥40.31	小田 倉茂 ④41.17	日塔 仁 ⑨41.32	加藤 暢 ④39.40	田中 稔 ⑩42.50	立蔵 義春 ⑪42.58	青木 実雄 ⑤40.21	小沢 光志 ⑫44.31
20	～直海	15.1 km	新地 憲宏 ②45.52	黒岩 哲夫 ⑤46.58	吉元 政昭 ⑥47.02	伊藤 博幸 ⑧48.19	長友 清美 ④46.00	吉川 徹 ④46.34	菊地原浩二 ①45.42	大和 忠広 ⑦48.16	谷地田幸雄 ⑩50.59	木村 直樹 ⑫53.13	勝谷 弘志 ⑨50.02	吉田 健司 ⑩50.47
21	～志賀	8.6 km	照井 典勝 ①25.14	高橋 幸宏 ②25.39	小林 雄二 ③25.46	藤山 孝志 ③27.32	福井 清孝 ④26.39	伊藤 孝 ⑤26.55	橋本 康司 ⑥26.59	竹本 博 ⑦27.10	高橋 誠 ⑨28.31	宮本 一義 ⑪28.47	小田 幸生 ⑩28.40	宮窪 幸弘 ⑫29.34
22	～羽咋	14.1 km	坂本 亘 ①42.30	丸橋 久良 ②43.13	榎田 登 ③43.55	福山 護 ⑦45.07	金子 敏雄 ④44.19	関根 唯夫 ⑤44.53	渡辺 要 ⑧46.00	岩見 政勝 ⑤44.53	横江 功 ⑨46.41	竹沢 博 ⑩47.10	楠木 長武 ⑪47.03	小山内 昇 ⑫48.40
23	～高松	15.6 km	斗高 克敏 ①48.44	山岡 秀樹 ②48.54	山元 章義 ③49.11	岩木 久典 ④49.38	疋田 康彦 ⑥52.17	神先 宏彰 ⑧52.37	千葉 博久 ⑩53.18	永山 隆一 ⑤52.06	三浦 文男 ⑨52.58	草間 進 ⑦52.27	森宗 康典 ⑪55.01	喜多 秀幸 ⑫57.38
24	～津幡	12.8 km	中村 孝生 ①38.09	平野 淳俊 ②40.28	森下 好美 ⑥41.24	藤川 秀幸 ④40.58	才力 伸隆 ⑨42.05	川島 二郎 ④40.53	石田 正治 ③40.42	船木 正信 ⑧42.03	半場 秀則 ⑫44.21	児玉 健 ⑩42.27	小林 睦和 ⑪45.14	林 弘嗣 ⑦41.46
25	～森本	7.4 km	坂本 充 ①22.16	下野 郁雄 ③23.22	平盛 惣一 ④23.32	満寿川 誠 ⑥24.04	尾花 幸次 ②23.08	井川 善博 ⑤23.36	小島 栄次 ⑦24.28	渡辺 公照 ⑨24.30	熊谷 武治 ⑦24.28	中村 洋幸 ⑩25.35	明石 芳夫 ⑫32.49	斉藤 秀樹 ⑪26.41
26	～金沢	10.5 km	新宅 雅也 ①32.49	蜂須賀 明 ③33.45	法村 昌三 ③33.45	福田 保 ⑥34.03	戸冢 春寿 ③33.50	石田 和明 ②33.06	岡 秀夫 ⑦34.52	黒崎 幸雄 ⑩37.15	星 文夫 ⑤35.16	森 喜太郎 ⑨39.03	宮崎 恭臣 ⑩39.03	安居院高志 ⑫39.07
第三日		129.2km	①6.33.17	②6.41.27	③6.42.34	⑤6.51.56	⑥6.52.20	④6.51.08	⑧6.57.59	⑦6.56.56	⑨7.12.34	⑩7.18.33	⑪7.22.23	⑫7.26.14
通算		341.6km	①17.27.38	②17.48.38	③17.52.26	④18.18.26	⑤18.22.24	⑥18.22.37	⑦18.30.00	⑧18.38.33	⑨19.13.26	⑩19.29.08	⑪19.32.50	⑫19.46.04

警本部と10回連続出場の東北学連、個人では記録委員長として10回務めた石川県陸協常務理事の橋本庄良氏、審判長の坂井敏夫氏らに表彰状と記念品が手渡された。

また坂井敏夫審判長は次のように講評している。

2、3日目の荒天で記録的にはやや低調な大会だったが、その中で日体大の計4つの区間新と、1日目の通算タイムの記録更新は立派だった。京都産業大、北信越学連の活躍で中、下位も上位に負けない激しい順位争いをし、見ごたえのあるレースをしてくれたのも心強く思った。各チームの力が年々接近してくれたのは喜ばしい。コースもより整備され、回数も10回と一区切り。来年も実りの多い大会が

出来るよう期待したい。

昭和52年の10000m日本10傑によると、29分20秒6は10位である⁸⁾。29分台の選手を8人も揃えた日体大は、選手層の厚さがあった。それに加え、岡野監督の好采配によって、2年連続の完全優勝を果たした。

まとめ

以上、第1回から第10回大会までの概要とレース模様、記録を概観してきた。能登駅伝の開催及び廃止に至る過程について、今後さらなる追究を試みたい。

注及び引用参考文献

- (1) 大久保英哲・親谷均二「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程―第1回開催（1968）から第10回大会（1977）に至るまで―」金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号，2015
- (2) 大久保英哲・親谷均二・北川潔「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程―第1回（1968）から第10回大会（1970）―」金沢星稜大学人間科学研究第9巻2号2016
- (3) 大久保英哲・親谷均二・北川潔「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程―第4回開催（1971）―」金沢星稜大学人間科学研究第10巻1号，2016
- (4) 大久保英哲・親谷均二・北川潔・櫻井貴志・佐々木達也・西村貴之・阿羅功也「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程(4)―第5・6・7回開催（1972～74）―」金沢星稜大学人間科学研究第10巻2号，2017
- (5) 大久保英哲・親谷均二・北川潔・櫻井貴志・佐々木達也・西村貴之・阿羅功也「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程(5)―第8回開催（1975）―」金沢星稜大学人間科学研究第11巻1号，2017
- (6) 第9回大会プログラム
- (7) 読売新聞 昭和51年11月13日
- (8) 読売新聞 昭和51年11月21日朝刊
- (9) 読売新聞 昭和51年11月21日朝刊
- (10) 読売新聞 昭和51年11月22日夕刊
- (11) 読売新聞 昭和51年11月23日朝刊
- (12) 読売新聞 昭和51年11月24日朝刊
- (13) 読売新聞 昭和52年11月11日朝刊 北陸特集
- (14) 読売新聞 昭和52年11月22日朝刊
- (15) 読売新聞 昭和52年11月23日朝刊
- (16) 読売新聞 昭和52年11月24日朝刊
- (17) 読売新聞 昭和52年11月24日朝刊
- (18) 日本陸上競技連盟七十年史編集委員会（1995）ベースボールマガジン社p.817

付記

本論文は、平成28年度金沢星稜大学共同研究費（研究代表者大久保英哲）の助成を受けている。大久保英哲が全体の構成や表現を含めた論文作成を統括し、親谷均二と北川潔が、これまでの所蔵資料の中から当時の記録をもとに作成した。その際、大久保が指導した鈴木仁子（2009）「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会について―第1回開催（1968）から中止（第10回大会・1977）に至るまでの経緯―」，平成21年度金沢大学教育学部卒業論文を基本資料として参考にしている。また2016年11月19～21日の3日間、共同研究者（大久保・親谷・櫻井・佐々木・西村・阿羅）は、親谷の案内で、第10回大会のコース沿いに現地をトレースし、出発地点、中継点、ゴール地点を確認するとともに、沿道沿いの住民に当時の駅伝がどのように記憶されているかの調査を行った。1977年を最後に大会が廃止されて、本年2017年でちょうど40年。来年2018年は開始からちょうど半世紀の50年目に当たる。この節目の期に、これらの成果をまとめていきたい。関係者諸氏のご指摘、ご叱正、また関係資料のご提供をお願いしたい。